

特集

報告

障害福祉現場で働く職員の育ちと集団化

ささやかに見えようとも、 「人間的価値の大きな事実」を確かめ合う 征児が教えてくれる、職場づくりの視点

村岡 真治

1 葛藤しつつ、新たな育ちの願いを内側に宿す

(1) おやつの買い物で役割を果たす

●激しい不安を母親にぶつける

2020年3月、新型コロナウイルスで突然、全国一斉の休校が始まった。ゆうやけ子どもクラブ（以下、「ゆうやけ」）は、感染対策を取りながら、休校中も活動を継続した。

征児（高1、自閉症）は毎日、ゆうやけに参加してきた。だが、休校のまま迎えた4月、活動終了後、母親が迎えにくると、母親を叩いたり、髪の毛を引っ張ったり…。大声で泣き出しもする。

あとで聞くと、帰宅してからも、そんなことが続いたようだ。

高等部は、小・中学部とは別の特別支援学校に通うことになっていた。だが、学校が予定どおりに始まらない。そのため征児は、大きく混乱してしまったのだろう。激しい不安を、親密な関係にある母親に、思わずぶつけてしまっていたに違いない。

実は、私は以前から、征児のことが気になっていた。中学部に入って、それまで参加していたフォークダンスをしなくなった。電車で外出するときも、予定していた路線で帰らないと気がすまない。年度替わりには、特定の人を叩いたり、特定の女性職員を触ったりすることもあった。

自分の意思が強くなってきて、そこから外れることを受け入れにくくなった。そうした不安定さが、人間関係の結び方に表われるのだろう。自分の思いをストレートにぶつけても大丈夫な人には、叩くという行動で、また、受け止めてくれる人には、スキンシップを求めるという形で。

（対応を先送りにして、申し訳なかった。今こそ、正面から取り組まねば！）。

●4ヵ月間の休校は子どもに深刻な影響

ゆうやけ（東京・小平市）は、学校の放課後や長期休業中に活動する、放課後等デイサービス（以下、「放課後デイ」）の事業所だ。市内に、子どもクラブ（定員20人）、第2子どもクラブ（定員10人）、第3子どもクラブ（定員20人）の3事業所がある。遊び・生活をつうじて、子どもの人格を育てることを目的にしている。

現在、知的発達の遅れや自閉症などの障害をもつ、小学生から高校生まで60数人が在籍する。職員は、常勤職員8人（正規職員6人、臨時職員2人）のほか、非常勤職員30数人が働いている。子どもの出席数の6～7割の職員数で活動する。

4ヵ月間にわたった休校は子どもに、深刻な影響を及ぼした。征児も、その中の1人だった。

●幼い存在ではなく、役割を果たしたい

当初、征児の迎えは、母親に代わって父親が、仕事を早めに切り上げて行った。その後はヘルパーが引き継いだ。

征児は、父親や私の心配をよそに、ヘルパーをすんなりと受け入れた。毎日、ヘルパーを後ろに従えるようにして、自宅まで10分ほどの道を歩いていく。

父親が征児に試しに聞いた。「お迎えはパパがいい？ ヘルパーさんがいい？」。征児は即答する。「ヘルパーさんがいい！」。

また、私が保護者に書類を配っているとき、征児は私に手を差し出して、「紙！」と言う。自分で「紙（書類）」を持ち帰りたいらしい。

私は、紛失してもいい、ダミーの書類を用意した。「おうちに帰ったら、お母さんかお父さんに渡してね」。書類を渡すと征児は、大事そうに両手で抱えて、帰宅していく（写真1）。

（いつまでも親につき添ってもらう、幼い存在でいたくない）（自分なりの役割を積極的に果たしたい）— 征児は、一変した生活に葛藤しつつも、新たな育ちへの願いを内側に宿していたに違いない。

●おやつの買い物が、征児の生活に定着

私は、職員会議で、今の征児をどう見るかについて提起した。また、活動準備の合間にも、正規職員の井原（女性）と相談をした。井原は、「役割を果たすために、おやつを買ってくるのはどうか」と言う。

コロナ対策で、おやつ調理を休止していた。そのため、職員が毎日、おやつ用の菓子（個包装のもの）を買い出しにいていた。井原は征児に、その代わりをさせようと言うのだ。

ただ、当日のおやつを買ってくるのでは、時間のゆとりがない。私は征児に、「あしたのおやつ、買ってきてくれる？」と聞く。征児は、「くれる！」と答える。

私は、買い物用のバッグを準備した。書類運びのように、手に持つものがあれば、役割をイメージしやすいと考えたからだ。

そして、征児にメモを見せながら、読みあげる。「ソフトサラダ1ふくら アルフォート2ふくら かってきてください」（「ソフトサラダ」はセンベイ、「アルフォート」はチョコ菓子）。

征児は、バッグとメモを片手ずつに持って、徒歩でスーパーに向かう。非常勤職員の小柳（女性）が同行する。

翌日、私は征児に、買ってきた菓子が入ったバ

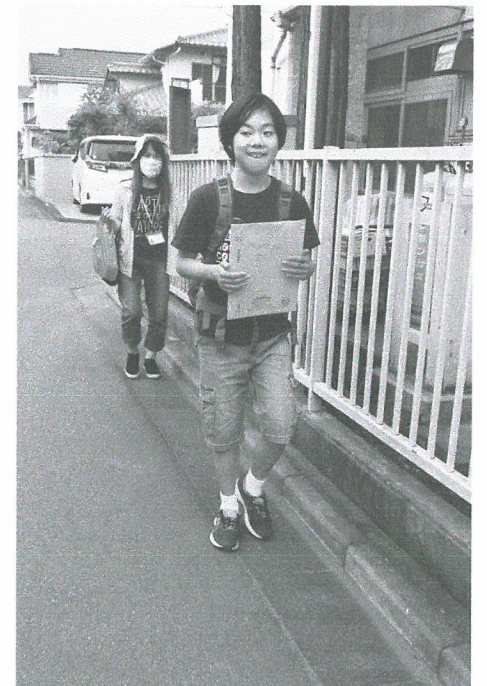


写真1 書類を持ち、帰宅していく

ッグを渡す。「きのう買ったおやつをみんなに配ってね」。征児は、バッグから菓子を取り出しては、子どもや職員の手のひらに置いていく。

こうしたことを続けるうち征児は、ゆうやけに来ると、毎日のように、私や井原に「バッグ（を出して）！」と言ってくる。私が「お買い物、行きますか？」と聞くと、両手で握りこぶしをつくって、「行きます！」と答える。

次第に、おやつのお買い物が、征児の生活に定着してきた。家庭でも、征児が母親に向かっていくことがなくなった。

(2) 他者の意図を汲み取り、自分の行動を調整する

●おやつ注文を聞き、買ってくる

とは言え征児は、菓子を買ってきたときや、ほかの人に配るとき、「ありがとう」などと言われなくても、ほとんど表情を変えない。征児がどれだけ他者を意識しているか、とらえきれなかった。

私は、こう考えた。（ならば、他者と交わる手応えを、征児の心にとことん貯えよう。いずれ